ラコニア陥落

「ウィリアムさん！おはようございます！」

「……朝から元気ですね。おはようございます」

うざったそうな表情のウィリアムを、きらきらした眼差しで見つめるカール。

それを見ていたウィリアムらの上官がこちらに歩み寄る。

「お、二人は知り合いか。ならお前が世話してやれ」

「なっ！？そんな！」

いきなりの決定に咄嗟に言葉がこぼれた。

「ん？口答えする気か外国人」

ぎろりと睨まれ、たじろぐウィリアム。上官、そして相手は二級市民。いろんな意味で口答えができようはずもない。

「いえ、了解しました。配置はこっちだカール」

「あ、はい！」

配置についたウィリアムとカール。砦の上段、弓兵の後ろに待機する。とおくにはいつも通り拠点から軍が出陣し始めている。全くもっていつも通り、予定調和の進軍。

「お前も災難だな。僕みたいな嫌われ者と一緒になって」

だからこそ退屈なのか、気まぐれにウィリアムはカールに声をかけた。無言の圧力に困り果てていたカールは顔を輝かせる、そして言われたことを吟味して、

「ウィリアムさん、嫌われてるんですか？」

ぽかんとするカール。先程のやり取りの意味すら分かっていなかったらしい。

「嫌われているよ。最初は加減がよくわからなかったからな」

加減と言うニュアンス、またまた首を傾げるカール。

「いや、ただ……兵士ってのがこの程度だったことと、人の嫉妬心を過小評価してたってことだけだよ」

ぽかんとするカールから視線を切り離し、砦の外を眺める。今日は野戦ではなく砦にこもって戦う守戦。ラコニアの砦に攻め寄せる軍勢を眺める。

「ん、いつもより……多いか？」

地鳴りが、砦に響き始める。ついで周囲がどよめく。

「多いというより、多すぎる」

いつも通りが、音を立てて崩れ行く。ラコニアの砦から怠惰な雰囲気が消し飛んでいく。

カールは腰を抜かした。昨日が初陣。その初陣でさえ小競り合いのようなもの。

今日向かってくる軍勢に比べればあまりに小規模。

「うんがいいな、カール君」

ウィリアムに視線を向けるカール。その顔は――

「戦争が味わえるぞ、たんまりな」

凄絶な笑み。

ラコニアの平穏は今日崩れる。

死戦が始まった。野戦は死屍累々。すでにラコニアの砦の前に味方の軍はいない。砦には多くの梯子がかかり、一部では敵軍の進入を許した場所もあった。もはや誰の隊が、何処の所属かなど関係ない。明らかな敗戦、負け戦。

「悪くないね」

ウィリアムは笑顔で進入してきた的を切り捨てる。カイルに比べれば赤子と大人、比較することすらおこがましいレベル。

「それどころか良い。イイ、最高にイイ！」

鎧の継ぎ目にゆうゆうと剣を差し込み、上に跳ね上げる。相手の喉が裂け、ひゅーひゅーとした風切り音が鳴った。喉を断たれれば叫ぶことすら出来ない。

「本当に俺はツイている！」

梯子から首を出した的を思いっきり蹴飛ばした。数人巻き込み落ちていく姿を、笑みを持って見送る。

「さーて、撤退の合図があるまで適当に刈っとくか」

ウィリアムは混乱に乗じて敵を切り裂いていった。敵の攻撃を避け、ときには味方を盾にして防ぐ。隙きのない立ち回りは、そこらの一兵卒とは次元が違う。

（テメエらとは違うんだよ虫螻ァ！僕の稽古相手はあの馬鹿でかい見世物小屋のゴリラ見てーなやつだ。ついでに、ただバカみたいに素振りしているだけでもない。頭を使って、効率的に身体を鍛えた。てめえら虫みたいな頭みそしてるゴミカスとはそもそも行きてる世界が違うんだよっ！）

さすがにこの内心を吐露するわけにはいかない。吐き出せば、止まらない。（ん、お、カール君も生きてるじゃないか。まあ死にそうだけど）

必死に剣を振り回すカールだが、動きは明らかに素人。敵兵も大した腕ではないが、あれでは死ぬのも時間の問題だろう。

「た、助けて！」

周囲に助けを求めるが、当然誰も反応していない。そんな余裕もないし、皆自分のことで精一杯なのだ。誰の反応もなく、敵の槍がカールの頬を引き裂いた、転げ、小便を漏らすカール。しの寸前――

「だ、だれ、か」

その瞬間、ウィリアムとカールの死戦は交差した。たったの一瞬、刹那の邂逅。（誰が助けるかよ。どうせ、お前も幸せだったんだろ？家族がいて、温かい飯が出て、ふかふかのベッドがあって、それで、それで――）

ウィリアムは死戦を外す。それは死刑宣告に等しい。

「あ」

小さく一言、こぼれ落ちた。それは絶望の一言。すべての終わり。

「死ねェェェェェェェェエエ！」

敵兵、オストベルグの塀も命がけである。彼にも家族はいる。守るべき、愛すべき、家族を守るために此処に――

「ェェェェェェェェえっ！？」

槍が、空中に舞う。槍だけではない。それを振るっていた腕ごと舞い、散る。血煙が、視線を妨げる。何が起きたのか理解できない。理解できないが、

「死ね」

己の死は理解できた。

はね飛ぶ首。返り血が飛ばないように、カールの前に立つ人物は敵兵の遺体を蹴り飛ばした。

（俺は……何をしている？）

ウィリアムは、自分のしたことが信じられないでいた。震える手。殺したことに震えているわけではない。救ったことに震えているのだ。外側の人間を救った。裕福そうな、幸せそうな、コンナ場所に不釣合いな青年を救う。ありえない。

（一瞬、一瞬だけ、あの男がダブった。あの、赤い髪の御坊ちゃまが）

自分が手にかけた赤い髪の青年。存在を奪い取った男。その評定が、怨嗟の表情が、ノルマンと呼び笑っていた表情が――

「あ、ああ、ウィリアムっ！」

感極まって泣き出すカール。「さん」すら付け忘れ、ウィリアムに縋り付き泣く。「ありがとうありがとう」とつぶやき続ける。その光景を、ウィリアムは冷めた目で見てた。

「別に……立てるか？」

ウィリアムは視線を合わせずに手を差し伸べる。今の表情を見られるわけにはいかない。誰にも、カイルやファヴェーラにすら見せられない。

「ありがとう、ウィリアム。……あっ、さん」

最後に付け忘れていたことを思い出し、無理やり付け加えるカール。

「ウィリアムでいい。そろそろ退く準備をするぞ」

「え、でも持ち場を離れていいの？」

ウィリアムは向かってくる敵兵を無造作に撫で斬り、カールの方に向いた。すでに表情は平静そのもの。すでに『自分』の幻影は見えない。

「よくはない。ただもうそれを咎める者は死んでるからな」

さきほど次いでに敵兵の矛を防ぐため、上官の男を盾にしたことを思い出す。ついでには違いないが、必要なことである。

（そもそも、この死戦に必要なのは大勢の上官の死。生き残りが……自動的に繰り上がるくらいにゃ死んでもらわなきゃ困るんだよ）

死戦に浮かされて死ぬのは馬鹿の極み。

（まあ、こいつはこいつで利用価値もあるだろ。そう思わないとやってられん）

ウィリアムはカールの間抜け面に死戦を移した。漏らしてしまったことに今更恥ずかしさを覚え、顔を赤らめている。一応まだここは戦場の真っ只中だというのに暢気な話である。

「行くぞ。死にたくなければ付いて来い」

「う、うん！」

ウィリアムは後ろにカールを引き連れて砦を下る。退くならば北門まで自然と下がらねばならない。あまりに露骨だと見咎められ、要らぬ面倒を背負い込むことになる。

（うまく退かねば……こんな糞つまらん所で死ぬ羽目になるからな）

ウィリアムは、背後を見てため息をつく。

（はあ、ほんとに、俺はなにをしてるんだ）

目を輝かせウィリアムの後についてくるカールの姿があった。

この日、ラコニアの砦はあっさりとと陥落した。